武蔵野日曜集会

活ける水

――ヨハネ伝第４章１～19節――

１９８４年3月11日（武蔵野）
小池辰雄

神の賜物（たまもの）を知る　永遠の生命の水湧きいづべし　曠野の泉　なんじら渇ける者ことごとく水にきたれ　活ける水の源なる我　祈りとは活ける水を飲むこと　活ける水の証者となれ　我々の生涯そのものがドラマ

【ヨハネ４・１～19】

1主、おのれの弟子を造り、之にバプテスマを施すこと、ヨハネより多しとパリサイ人に聞こえたるを知り給いし時、2（その実イエス自らバプテスマを施ししにあらず、その弟子たちなり）3ユダヤを去りて復ガリラヤに往き給う。4サマリヤを経ざるを得ず。5サマリヤのスカルという町にいたり給えるが、この町はヤコブその子ヨセフに与えし土地に近くして、6此処にヤコブの泉あり。イエス旅路に疲れて泉の傍らに坐し給う、時は第六時頃なりき。7サマリヤの或女（あるおんな）、水を汲まんとて来りたれば、イエス之に『われに飲ませよ』と言いたもう。8弟子たちは食物を買わんとて町にゆきしなり。9サマリヤの女いう『なんじはユダヤ人なるに、如何なればサマリヤの女なる我に、飲むことを求むるか』これはユダヤ人とサマリヤ人とは交（まじわ）りせぬ故なり。10イエス答えて言い給う『なんじ若し神の賜物（たまもの）を知り、また「我に飲ませよ」という者の誰なるかを知りたらんには、之に求めしならん、然らば汝に活ける水を与えしものを』11女いう『主よ、なんじは汲む物を持たず、井（いど）は深し、その活ける水は何処より得しぞ。12汝はこの井を我らに与えし我らの父ヤコブよりも大いなるか、彼も、その子らも、その家畜も、これより飲みたり』13イエス答えて言い給う『すべて此の水をのむ者は、また渇かん。14然れど我があたうる水を飲む者は、永遠に渇くことなし。わが与うる水は彼の中にて泉となり、永遠の生命の水湧きいづべし』15女いう『主よ、わが渇くことなく、又ここに汲みに来ぬために、その水を我にあたえよ』16イエス言い給う『ゆきて夫をここに呼びきたれ』17女こたえて言う『われに夫なし』イエス言い給う『夫なしというは宜（うべ）なり、18夫は五人までありしが、今ある者は、なんじの夫にあらず。無しと云えるは真なり』19女いう『主よ、我なんじを預言

者とみとむ。

●神の賜物（たまもの）を知る

1主、おのれの弟子を造り、之にバプテスマを施すこと、ヨハネより多しと
パリサイ人に聞こえたるを知り給いし時、2（その実イエス自らバプテスマを
施ししにあらず、その弟子たちなり）3ユダヤを去りて復ガリラヤに往き給う。

エルサレムの方に来られて、それからまた、ガリラヤの方に戻るということになっている。その間に、エルサレムではニコデモとの聖霊の問題の会話があった。エルサレムでもいろいろな徴を顕された。徴にまたユダヤ人は躓いているわけです。それが2章、3章あたりに出ています。

キリストは、洗礼のヨハネが言っているように、聖霊と火のバプテスマをなさる方で、水のバプテスマはしない。だから、

「イエス自らバプテスマを施ししにあらず」

という。聖霊のバプテスマは結局――洗礼のヨハネはそう言ったけれども――地上ではなさらないわけです。聖霊のバプテスマは、十字架を通って天界に行ってからのはなしです。そこまで洗礼のヨハネは分かっていなかったと思いますけれども。

キリストは贖罪をしないことには聖霊を与えない。それはハッキリしている。一時的には聖霊を、御霊のバプテスマを施して、十二の弟子を遣わしたということはあります。一時的には作用したけれども、それは一時的なはなしだということは、キリストは分かっていらっしゃる。

4サマリヤを経ざるを得ず。

それはそうですね。サマリヤを経ると、例のヤコブの泉の所に来るわけです。

5サマリヤのスカルという町にいたり給えるが、この町はヤコブその子ヨセ
フに与えし土地に近くして、6此処にヤコブの泉あり。イエス旅路に疲れて泉
の傍らに坐し給う、時は第六時頃なりき。7サマリヤの或女（あるおんな）、水を汲まんとて
来りたれば、イエス之に『われに飲ませよ』と言いたもう。

なにしろ、荒野ですから、水は非常に乏しい。ヤコブの泉も100フィート位の深さです。それくらい掘らないと水は出てこない。岩盤を掘るんです。キリストは、

「われに飲ませよ」

と言われた。キリストも正直、普通の人間ですから、喉が渇いた。そこで、「飲ましてくれ」と。

8弟子たちは食物を買わんとて町にゆきしなり。9サマリヤの女いう『なんじ
はユダヤ人（びと）なるに、如何なればサマリヤの女なる我に、飲むことを求むるか』

ユダヤ人とサマリヤ人とは仲が悪いわけですから。その仲が悪いのにも、善きサマリヤ人

というのはいるんだということで、ルカ伝の方ではそういう話をキリストはされたわけです。自分たちは選民だと言って驕り高ぶったってダメだと。このサマリヤの女はとにかく、ユダヤ人ということがすぐ分かるものですから、こうハッキリ言ったわけだ。

これはユダヤ人とサマリヤ人とは交（まじわ）りせぬ故なり。10 イエス答えて言い給う『なんじ若し神の賜物（たまもの）を知り、また「我に飲ませよ」という者の誰なるかを知りたらんには、之に求めしならん、然らば汝に活ける水を与えしものを』

いきなりキリストは高次元の答えをなさったわけです。「神の賜物」なんて言ったって分からないんだ。

●永遠の生命の水湧きいづべし

「「私に飲ましてくれ」と言ったこの私が誰だか分からないだろう。知ったらば逆に、飲ましてくれと言うはずなんだ。然らば汝に活ける水を与えしものを」

と。今日は「活ける水」と題した。一体、水に「活ける水」なんていう言い方はもともとおかしいんですよ。日本語では「活ける水」と訳してあるが、ギリシア語では「ヒュドール・ゾーン」――「ゾーエー」というのは生命です――ヘブライ語の言い方だと、「マイーム・ハッイーム」と言いまして「生命の水」という言い方になる。「生きている水」と言ったって、これはキリストの新しい表現なんです。

11 女いう『主よ、なんじは汲む物を持たず、井（いど）は深し、その活ける水は何処より得しぞ。12 汝はこの井を我らに与えし我らの父ヤコブよりも大いなるか、彼も、その子らも、その家畜も、これより飲みたり』

その活ける水と仰ったのは、どこから得ましたかと。なにか夢みたいなことを言いなさるな、というわけだ。

13 イエス答えて言い給う『すべて此の水をのむ者は、また渇かん。14 然れど我があたうる水を飲む者は、永遠に渇くことなし。わが与うる水は彼の中にて泉となり、永遠の生命の水湧きいづべし』

ヨハネ伝4章14節というのは極めて大事な節です。これが本当に自分のものになれば、もう完全にそれはキリストの中に入っていることになる。

15 女いう『主よ、わが渇くことなく、又ここに汲みに来ぬために、その水を我にあたえよ』

この「活ける水」を飲んだって、肉体は渇きますよ。だから、キリストは

「我に飲ませよ」

なんて仰った。お腹は空くし喉は渇く。それはキリストも同じことなんです。けれども、お腹が空いて喉は渇いても、本当の意味の渇きのない、そういう水があるんだと。「水」と言ったって、この水とは桁が違う水なんだ。ところが、そんなことは分からないから、

「ここに汲みに来る必要がないように、そういう一遍飲めば渇かないような水をくださいよ」

と。そうすると、キリストの答えはまた変わっているんだよね。

「そうじゃないよ、肉体は渇くよ」

なんて、そんなことは仰らない。

16**イエス言い給う『ゆきて夫をここに呼びきたれ』**17**女こたえて言う『われに夫なし』**

ハッキリと、うそを言わなかったね。

イエス言い給う『夫なしというは宜なり、

「宜なり」とは、「その通りだ」ということ。

18**夫は五人までありしが、今ある者は、なんじの夫にあらず。無しと云えるは真なり』**

まぁ、イエスというひとは不思議な人だね。初めてでっくわした女性の成り立ちが見えてしまう。「五人までであった」なんてね、人数まで。

19**女いう『主よ、我なんじを預言者とみとむ。**

今度は「主よ」と言い出した。あんたは預言者ですねと。

●曠野の泉

「水」というのは、創世記から黙示録まで一番大事な言葉のひとつです。こんなに「水」という字があるかと思う。今日、聖書の中から「水」という言葉を取り出したら、夕方までかかっても終わらないかもしれない。それくらい、水という言葉がある。「火」という言葉も相当あるけれども、「水」の方が多い。イスラエルという所は非常に水が尊いものですから、水に非常に渇いているわけだね。それで、聖書は「水」のことを非常に言っている。少し拾ってみます。別に順番はない。

創世記の2章10節に、

「河エデンより出でて園を潤し、彼処より分かれて四つの源となれり」（創世記2・10）

という。「生命の樹」があるという。なぜ、「生命の樹」があるか。水がなければ、地下水がなければ、木は育たない。木も草も花も。

創世記の第1章からして、「水」もちろん出ている。

「天の上の水と下の水」

なんて書いてあるでしょ。

「6**神言いたまいけるは水の中に穹蒼ありて水と水とを分かつべし。**7**神穹蒼を作りて穹蒼の下の水と穹蒼の上の水とを判ちたまえり。即ち斯なりぬ。…**

…10神乾ける土を地と名づけ水の集合るを海と名づけたまえり。神之を善と観たまえり。」（創世記1・6～9）

と。それから、創世記16章7節に、

「7エホバの使者曠野の泉の傍ら即ちシュルの路にある泉の傍らにて彼に遭いて云々」（創世記16・7）

と。この「曠野の泉」というのが非常に大事なわけです。

それから、21章19節に、

「19神ハガルの目を開きたまいければ水の井あるを見、ゆきて皮袋に水を充たし童子に飲ましめたり。」（創世記21・19）

皮袋に、羊や何かの皮で作った袋に水を入れるわけです。

24章に、アブラハムの使いが出かけて行って、リベカを得るところの有名な婚姻のところです。この24章はゲーテが非常に好きだったところで、「ヴェルテルの悩み」の始めの方にもここが出てきますけれども。13節のところに、

「13我この水井の傍らに立ち邑の人の女等水を汲みに出づ。14我童女に向かいて請う、汝の瓶をかたむけて我に飲ましめよと言わんに彼答えて飲めまた汝の駱駝にも飲ましめんと言わば、彼は汝が僕イサクの為に定め給いし者なるべし。然ば我汝の吾主人に恩恵を施し給うを知らん。」（創世記24・13～14）

「水井」、水の出る井戸というのはほとんど泉のことです。水のある所はここしかないものだから、みんな女の人たちがそこに汲みにやって来る。そして、その中のある女性がリベカであるということが書いてある。そういう、水の非常にうるわしい記事のところです。

●なんじら渇ける者ことごとく水にきたれ

それから、26章がちょっと注意を要する。

「23かくて彼そこよりベエルシバにのぼりしが、24その夜エホバ彼にあらわれて言いたまいけるは、我は汝の父アブラハムの神なり懼るるなかれ我汝と偕にありて汝を祝み我が僕アブラハムのために汝の子孫を増さんと。25ここに於いて彼処に壇を築きてエホバの名を呼び天幕を彼処に張れり。彼処にてイサクの僕井を鑿り。……32その日イサクの僕来りてそのほりたる井につきて之に告げて我等水を得たりといえり。33即ち之をシバとなづく。この故にその邑の名は今日までベエルシバ（誓詞の井）という。」（創世記26・23～32）

「シバ」というのは本当は「シェバッハ」なんです。「ベエール」というのは「泉」という字です。井戸と言おうが、泉と言おうがいい。「ベエール・シェバッハ」とは恵みの「誓いの泉、泉水」ということです。

今度は出エジプト記を開こうかな。17章

「1**イスラエルの子孫の会衆エホバの命にしたがいて皆シンの曠野を立ち出で旅路をかさねてレビデムに幕張せしが民の飲む水あらざりき。2ここをもて民モーセと争いて言う我等に水をあたえて飲ましめよ。モーセかれらに言いけるは汝ら何ぞ我とあらそうや何ぞエホバを試むるや。……6視よ我そこにて汝の前にあたりてホレブの磐の上に立たん。汝磐を撃つべし、然せば其より水出でん。民これを飲むべし。モーセすなわちイスラエルの長老等の前にてかくおこなえり。」（出エ17・1～6）**

モーセが非常に苦しめられたのも、この「水」の問題です。モーセは岩を撃って水を出したということが書いてある。

修善寺の川のわきに温泉が出ているのは、子供がお父さんを冷たい水で洗っていたら、弘法大師がそれでは冷たかろうと言って、岩を突っついたら、そこから温泉が出てきて、その温泉で洗うようにしたという。

民数記略の21章17節に「水の歌」というのがある。

「17**時にイスラエルこの歌を歌えり云く井の水よ湧きあがれ汝等これがために歌えよ。」（民数紀略21・17）**

それから、イザヤ書55章に、

「1**噫なんじら渇ける者ことごとく水にきたれ、金なき者もきたるべし。汝等きたりてかい求めてくらえ。きたれ金なく価なくして葡萄酒と乳とをかえ。」（イザヤ55・1）**

「噫なんじら渇ける者ことごとく水にきたれ」

と、一番先に水のことが出ているわけです。

●活ける水の源なる我

それから、もっとハッキリした水のことはエレミヤの2章に出ている。

「12**天よこの事を驚けいたく怖れよとエホバいいたもう。13そはわが民はふたつの悪事をなせり。即ち活ける水の源なる我をすて自己水溜を掘れり。すなわち壊れたる水溜にして水を有たざる者なり。」（エレミヤ2・12～13）**

「活ける水の源なる我をすて」

という、この言葉です。活水の源なる我。だから、キリストはおそらくこの言葉を思い出されたと思います。活水源だね。活水源は、これは神さまなんです。この神さまの活水を飲んだのがキリストである。活ける水はもちろん生命の水なんです。生命を持っていると、人に生命をまた与える。だから、「活ける」は今度は、活かす水になる。活けるものは活かす。

神さまは、太陽のごとく、在るものは在らしめる。それをドイツ語でいうと、「ヴィルクザーメス・ザイン」という――「ヴィルケン」というのは「作用する、働きかける」とい

うこと――「働きかけるところの存在」というわけです。在ることが在らしめる。生きていることが生かしめる。光っていることが光らせる。太陽は光っているものだから、月が光っている。月は太陽に光らせられている。地球も何か青い光を発しているそうだ。みんなこれは太陽のおかげだ。要するに、そういう源泉です。活水源は源泉だ。このエレミヤ記2章13節が非常にヨハネ伝4章に直結するところの言葉です。

また、箴言5章15節に、

「15 **汝おのれの水溜より水を飲み、おのれの泉より流るる水をのめ。16 汝の流れをほかに溢れしめ、汝の河の水を巷に流れしむべけんや。……18 汝の泉に福祉を受けしめ汝の少き時の妻を楽しめ。19 彼は愛しき雌鹿のごとく美しき鹿の如し。その乳房をもて常にたれりとしその愛をもて常に喜べ。」（箴言5・15～19）**

人間の赤ん坊にとっては、活ける水はお母さんのおっぱいだからね、それでそういうことがちょっとここに書いてある。それは他のものはダメなんだ、やっぱり母親の乳でないと。いろんな養分が渾然として入っている。だから、牛乳で育てるのはよくない。それは内容的にばかりでなくて、愛情の関係からもよくない。肌に触っていないといけない。

●祈りとは活ける水を飲むこと

キリストは、

「我を飲め、我を食らえ」

と、「我という源泉を飲め」と言った。我という源食――源食という言葉はないけれども、もとの食べ物――キリストは源泉、源食だ。そうしたらば、渇かない。一体、それはどういう水か。その霊的な水は、いうまでもなく聖霊のことです。そのことはヨハネ伝7章に書いてある。

「その水とは聖霊のことだ」

と、ちゃんと説明してある。37節、

「37 **祭の終の大なる日にイエス立ちて呼わりて言いたもう『人もし渇かば我に来りて飲め。38 我を信ずる者は、聖書に云えるごとく、その腹より活ける水、川となりて流れ出づべし』39 これは彼を信ずる者の受けんとする聖霊を指して言い給いしなり。イエス未だ栄光を受け給わざれば、御霊いまだ降らざりしなり。」（ヨハネ7・37～39）**

「栄光を受け給わざれば」というのは、昇天していないということ。

「昇天するまでは御霊は来ない」

と、ここにもちゃんと書いてある。十字架を通って昇天してから御霊が来る。その「水」とは聖霊のことなんだと。7章のそこのところが一番いい解説になっているわけです。

聖霊を飲むと、あるいは聖霊を食らうと――「飲む」と言おうが「食らう」と言おうがいいですよ、キリストは

「わが肉を食らい、わが血を飲め」

と言われた――キリストの聖霊のバプテスマを受けると、この活ける水、活かす水を飲んだことになって、魂が渇かない。何かいわゆる落ち込みなんていうことがなくなる。

まぁ、いろんなことがあるよ。我々はこの人生のドラマで、プラスであろうがマイナスであろうが、これを本当の大プラスに、大肯定に化する力はこの聖霊です。活ける水です。このキリストの活ける水を祈りの世界でしょっちゅう飲んでいなくては。

「祈りとは活ける水を飲むことなり」

と。そうだよ。そうすると、これは活かす水だからね、我々は活かされる。だから、渇かない。キリストが仰るとおりです。聖霊のバプテスマを受けたら本当に私の魂は渇かないものな。いろんなことにでっくわせばでっくわすほど、逆に噴水してくる。逆にその水は素晴らしくなる。本当ですよ、これは。行き詰まりを知らない人になる。ブラウニングの辞世の詩以上の勢いを私は持っているから。

●活ける水の証者となれ

「[34]**神の遣し給いし者は神の言をかたる、神、御霊を賜いて量りなければなり。**」

（ヨハネ3・34）

とヨハネ伝3章34節にあるでしょ。限りないです。特に青年諸君は、

「ボーイズ・ビー・アンビシャス、イン・クライスト」

「キリストにあって、青年よ大志をいだけ」

という。私は「ボーイ」ですよ、いつまでも、幾つになっても。「青年」と今言ったけれども、私は永遠の青年だ。

「先生は老人じゃないか」

なんて。老人ではない。「ボーイ」なんだ。大体、呑気なんだ、私は。私くらい呑気な人間はいない。単細胞だから。単細胞動物です。クラーク先生がそう言ったということを、どこかで読んだか聞いたかした。

「イン・クライスト」（キリストにあって）

をぬかしてしまった。クラークさん以上の意味で私は皆さんに言っている。クラークさんは聖霊のことはあまり語らなかったらしい。

横浜に来た5人くらいの宣教師は凄かったんだよ。ヘップバーンもそうだ。あそこで使徒行伝を二晩ばかり講義したら、もの凄くあれして、とうとう3週間か4週間くらい講義が続いてしまったそうだ。リバイバルが起きてしまった。もう、その次元に今の青年諸君の魂が本当に突っ込んでいかなかったら。一年に一人新しい人を連れてくる約束をしてあ

るんだが、どうだな、みんな。呑気に構えていたら困る。もったいないですよね。この私の話を、やっぱり福音は直接に聞くのが一番いい。その次は録音。それから書かれたもの。聞いておけば、今度は書かれたものから響きが出て来るけれども。聞かないでいて、書かれたものから響きを受けとるのは、よほどそれは受けとり方の素晴らしい人だ。

それで、ヨハネ伝3章の今日学んだところで、活ける水が今度は河のごとくに泉となって湧きいずるという。我々はそのような生命が溢れてしょうがないという――何かしらんが、その人に接していると、楽になったり、力が来たり、明るくなったりという――そういう存在になっていかなくてはね。そのことをキリストが言われる。それが本当の証者です。

「活ける水の証者となれ」

ということがこの14節なんです。

「わが与うる水は彼の中にて泉となり、永遠の生命の水湧きいづべし」

と。湧きいでてどうするのか。人にそれを飲ませるというわけです。このキリストという源泉を飲まないでどうするかと。

「エン・クリスト」（キリストの中に）

というのは、その源泉の中に入ることですから。そうしたら、湧き出でてしょうがない。もう、こういうことをしゃべっていると、私は異言が出そうで困るんです。

●我々の生涯そのものがドラマ

日本の宗教でも、水といえば、「潔め」だとか、「みそぎ」だとか言うけれども、それはただ汚れたものを清めるくらいのことです。この水は――清めとか何とか言っているのではないですよ――生命を与える。生命づける。そこがいわゆる悔い改めのバプテスマと違うんだ、この水は。これは本当に聖霊の火と同じ質を持った水なんだ。

あるいは、それを熱泉と言ってもいい。日本は温泉が出るから熱泉の国だ。温泉はだいぶ冷めて入れるようにしてあるけれども、湧き出ているやつはみんな熱いんだから。手なんかつけられない熱泉なんだ。熱いんだ、この水は。それからもちろん、湧き清水もあるけれども。熱泉がまた人の病を癒すような力も持っている。冷たい飲み水であると同時に、我々の身体を温めて悪いものを治してしまうような熱泉でもある。

火山国であるということはいろいろな意味で我々にはありがたい風土であるわけです。日本は火山国で、いたる所に温泉があるということを瞑想してごらんなさいよ。もう瞑想しただけで、なにか温泉に入ったような気持になってしまうよ。私はちょっと不思議な男かね。よほどバカだとみえる。観念で思われているものはダメなんです、霊で思われてないと。霊で思われている世界はそういった霊的現実の中に入る。自然の恵みがすぐグッと来る。そういう弾力性のある魂にならないとね。

だから、私は自分で言ったらおかしいけれども、本来、詩人なんです。

「詩の世界が一番現実である」
とノバーリスが言った。ゲーテが、
「ディヒトゥング・ウント・ヴァールハイト」（詩と真実）
と言ったのもそういうことなんです。本当の「ディヒトゥング」（詩）の世界が本当の「ヴァールハイト」（真実）だと。詩の世界が真実であると。詩は虚構ではないんですよ、詩の世界は。素晴らしい小説は決して虚構ではない。内村先生は
「小説は嫌いだ」
と言ったのは、内村先生は本当の小説の真理が分かってないからあんなことを仰る。事実が一番いい。事実を本当に真理の角度から光を当てて構成していくのが小説なんだから。みな事実が土台になっているんです。単なる空想の世界ではない。
文学の形式にはドラマという素晴らしい形式がある。ドラマという形式でなくても、小説そのものが非常にドラマチックな小説があるからね。一番本質的なものはドラマなんです、たとえドラマの形でなくても。ダンテの『神曲』は叙事詩ですけれども、非常にドラマなんです。そして、我々の生涯そのものがドラマなんです。あなた方は本当のドラマを、大歓喜のドラマを自分で生活をもって書いていけばいい。そういうドラマは天に映っている。神さまの光が闇の世界を変えていくドラマを自分でやっていかなければ。活ける水が湧き出でてしょうがない。また、火山の火が爆発してしょうがないような、そういうものがそのドラマの中にはあるはずです。そうしたらば、楽しいですよ、人生は。どんなマイナスも全部、プラスに変わる。聖霊はそのようなメタモルフォーゼを起こさせる。おしまい。